ペット以上、恋人未満

チェリ→

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ペット以上、恋人未満

【Ｎコード】
Ｎ２２９２Ｆ

【作者名】
チェリ↓

【あらすじ】
ある日、仔猫を拾った。すごく“カワイイ仔猫ちゃん”・・・といっても、成人男性ですが、何か？

―1―

週末の金曜日の夜―――。
あたしは仔猫を拾った。

酔った勢いで・・・。

“仔猫”・・・と言っても、実は“人間”だったりする。

3ヶ月前に恋人にフラれた。
それから週末はだいたい行きつけのショットバーで飲んで帰る。
そしてこの日もタクシーで帰ろうとしていたら、
突然一緒に乗ってきた“男”。

少し茶色かかった癖毛で猫っ毛みたいなその男は
タクシーに乗るなり寝てしまった。

・・・ちょっとっ・・・

あたしはその男の頬をつんつんとつついた。

「・・・う、・・・ん・・・。」

微かに反応はあるものの一向に起きる気配がない。

むー・・・。

今度は少し肩を揺さぶってみる。

だけど、まったく全然起きてくれない。

えー。

マジですかー？

困った・・・。

「お客さん、どちらまで？」

なかなか行き先を言わないあたしにタクシーの運転手が痺れを切らして聞いてきた。

どーしよ・・・。

「・・・九段下まで。」

とりあえず帰ろ・・・。

酔っていたあたしは明らかに正常な判断力を失っていた。

だって、普段のあたしなら絶対警察とかに連れて行ってとっとと帰るとこだもん。

自分のマンションに着いて、あたしはその男と一緒にタクシーを降りた。

そして、少しずつだけど歩く事までは出来るようになったその男を仕方なく部屋まで連れて帰る事にした。

だって放って置くワケにもいかないもん。

部屋に入って、とりあえずその男をベッドに寝かせた。

まさか一緒に寝るワケにもいかないし・・・

あたしはソファーにでも寝ようかな。

そう思ってあたしがベッドから離れようとした瞬間、
その男にいきなり腕を掴まれ、引っ張られた。

「え・・・ちょ・・・・っ！？」

思いっきり抱き合う格好になって慌てて離れようとしたら
ぎゅっと抱きしめられた。

えええええぇぇぇぇぇっっ！？

は、離れられない・・・

ジタバタと暴れてみるけれど全然ダメ。

「ち、ちょっと・・・」

「・・・ん・・・・。」

あたしの声にちょっとだけ反応する。

「ちょ・・・お、起きて・・・・。」

「うー・・・・ん。」

反応はするけど一向に離してくれない。

「ねぇってば！」

今度は少し大きな声で言ってみた。

「・・・・。」

あれ・・・？

反応もしなくなった。

・・・そして、その男はピクリともしなくなった。

「・・・・。」

どーすんのよ？

コレ！？

寝ようと思えばこのまま寝れるけど・・・・。

少し覆いかぶさるようにしっかりと抱きしめられている上、

押し潰されないまでもその男の体重があたしに伸し掛かっている。

「はー・・・・。」

とりあえず溜息をついてみた・・・。

「・・・。」

・・・あたしは観念してそのまま寝るコトにした。

――朝。

携帯の着メロに起こされた。

この着メロは・・・会社からだ・・・。

何よ・・・もぅー・・・。

やや二日酔い気味の体を少しだけ起こして

ベッドの脇に置いたカバンから手探りで携帯を出した。

「・・・はい、もしもし・・・？」

『あ、一ノ瀬さん？朝早くしかも休みの日にごめん！』

会社の同僚・奥田くんだ。

「どうしたの・・・？」

『実は・・・ちょっとトラブッちゃってて・・・』

・・・トラブル発生？

『今日、納品予定だった“リストランテ・カターニア”のテーブルとイスが間に合わないらしくて・・・。』

「え・・・それ、マズいんじゃないの？」

あたしは一気に目が覚めた。

『うん・・・非常に・・・。』

「あそこってたしか明日がオープンだよね？」

『そそ。』

「なんでまたそんな事になってんの？」

『うーん・・・どうも手配ミスらしくて・・・。』

「・・・。」

なんてこと・・・。

「と、とにかく・・・とりあえず今からあたし、会社に向かうから。」

あたしは電話を切って急いでシャワーを浴びた。

さすがに酔い気味のまま行くわけにも行かない。

お酒を抜かないと・・・。

そして、手早くメイクと着替えを済ませて、

何か引っかかることがあるような気がしながらも部屋を出た。

―2―

・・・ガチャッ・・・

―――夕方。

部屋に戻ったあたしは朝早くトラブルで呼び出され、

たいして遅くもない時間なのに疲れていた。

体は疲れてないけど精神的に疲れた・・・。

「はぁ・・・」

溜息をつきながら部屋の灯りを点けようとして、

すでに灯りが点いている事に気がついた。

・・・あれ？

あたし、今朝点けっぱなしで出掛けたのかな？

・・・そして・・・

部屋の中にいる見慣れない“何か”が視界に入ってきた。

「あ、おかえり。」

その“何か”はあたしの姿を認めるとにっこりと笑った。

「・・・た、ただいま・・・て、あなた誰っ！？」

「あ、俺？俺は河合綺羅人（かわいきらと）。」

どこからどう見ても２０代前半の男性・・・その“何か”は河合綺羅人と名乗った。

「な、なんで・・・ここにいるの・・・？」

「なんでだろ？俺も目が覚めたらここにいたからわかんない。」

河合綺羅人は不思議そうな顔をしながら答えた。

「目が覚めたら・・・て・・・あっ！」

あたしは昨夜、酔いつぶれた“仔猫みたいな彼”を

拾って帰ったのを思い出した。

・・・で、今朝慌てて出掛けたからベッドの中にいた彼に気付かずに

行っちゃったのか・・・。

しかも、彼は鍵がないから出るに出れなくてここにいた・・・？

ど、どうしよう・・・。

「ご、ごめんなさい・・・。」

「ん？なんで凌子さんが謝るの？」

「だって・・・て、なんであたしの名前知ってるの？」

「あ、お昼に宅配来たから受け取っておいたんだよ。
その宛名に“一ノ瀬凌子”様って書いてあったから。」

「な、なるほど・・・。」

「で？なんで凌子さんが謝ってるの？」

「だって・・・あたしが鍵かけて出掛けちゃったから・・・
帰るに帰れなかったのかな・・・と。」

「まぁ、確かに。」

「だから・・・ごめんなさい。」

「別にいいよ。俺、帰るトコなんてないし。」

「えっ！？」

帰る所がないって・・・

「あ、そーだ。言い忘れてたけど・・・

宅配で来た物、中身に食品って書いてあったから

勝手に冷蔵庫に入れさせてもらったよ。」

「え、あ、ありがとう。」

いやいや、今はそんな話じゃなくてっ。

「あの・・・ところで、帰るトコがないって・・・

どーゆー・・・」

「ん？そのまんまの意味だけど？」

「・・・。」

「そんな事より、凌子さん。」

「な、に・・・？」

「おなかすいた・・・。」

あ・・・そういえば・・・ここにずっと軟禁してたから

ごはんも食べに行けなかったのか・・・。

「じゃあ・・・閉じ込めちゃったお詫びにご飯作る。」

「やった♪」

彼はそう言うとニカッと笑った。

あたしはその笑顔がすごくかわいくて思わずクスッと笑ってしまった。

「あ、でも有り合せの物になりそうだけどいいかな?」

「全然ＯＫ！」

「んー、じゃあ何ができるかなぁ・・・?」

あたしは冷蔵庫を開けて残っている物を確認した。
すると彼が受け取って置いてくれた宅配の荷物が目に入った。

そういえば何が送られて来たんだろ？

荷物を出して送り主を見ると実家からだった。
あたしの実家は北海道で、よく野菜や魚介類を送ってくれる。
今回も野菜を送ってくれていた。
ちょうどこれで野菜スープが作れそうだ。

――――常備してあるパスタとミートソース、でミートスパゲティ、
あとは野菜スープを作った。

「うわぁーっ、うまそーっ！」

出来上がったパスタとスープを見て彼は嬉しそうな顔をした。

「なんかほとんど手抜きな感じになっちゃったけど、どうぞ。」

あたしがちょっと苦笑いしながら言うと彼は

「そんな事ないよ、頂きまーす。」

と、さっそくミートパスタに手をつけた。

よっぽどおなかがすいてたのかな？

そりゃそうだよね？

だって、朝からこんな夕方まで軟禁されてちゃね・・・？

なんか悪い事しちゃったな。

「おいしい♪」

彼はそう言うとにんまりと笑った。

まるで子供みたい。

あたしがクスリと笑うと彼は不思議そうな顔であたしを見た。

猫みたいに目をくるくると輝かせながら。

「なんか俺の顔に付いてる？」

「ううん、なんか猫みたいだなって思って。」

「猫？」

「うん。」

「どのへんが？」

「全体的に。」

「えー、初めて言われた。」

そう言ってアハハッと笑った姿もどこか仔猫みたいで

年下の男の子と言うより、ペットの猫が餌貰って喜んでる感じ。

「ねぇ、凌子さんさ、ペット飼う気ない？」

「ペット？」

「うん。」

「ペットかぁ・・・犬とか猫とか好きだし、

飼いたいとは思うけど・・・今は仕事が忙しい時もあるから

ちゃんと面倒見てあげられないし・・・。」

「ふーん・・・じゃあさ、放っておいても文句も言わないし、

拗ねないし、面倒見なくてもいいし、それでいて癒してくれるペットなら？」

「あはは、そんなペットなら是非飼いたいけど、そんなのどこに・・・」

「ここにいるよ。」

あたしが笑いながら言うと彼は自分を指してにんまりと笑った。

「・・・へ？」

「だから、俺。」

「・・・。」

またまた。

「俺を飼う気ない？」

「なんで？」

「さっき猫みたいって言ったから。」

え・・・。

「凌子さんなら俺、飼われたいなー。」

彼はそう言うとまた大きな目を猫みたいにくるくると輝かせて

あたしを見つめた。

う・・・そんな可愛い瞳で見つめられると・・・

「あたしと居ても何もいい事ないよ？」

「ペットだからそんなの気にしなーい。」

「・・・。」

「それとも凌子さん、彼氏とかいたりして俺が居ちゃ、やっぱマズい？」

「いや、今は彼氏なんて居ないけど？」

“今は”・・・

「俺、凌子さんが疲れてる時は全力で癒すから。」

やばい・・・なんか、このまま彼に流されてしまいそう・・・。

「ダメ？」

彼はそう言うとあたしの顔を覗き込んだ。

その表情がまた捨てられて拾って欲しそうな仔猫みたいで可愛くて・・・

帰るトコないって言ってたしな・・・

「あたしホントに構ってあげられないよ?」

「凌子さんが俺に構いたい時に構ってくれたらいいよ。」

「ご飯だって不規則だし。」

「凌子さんが帰ってくるの待ってる。」

「・・・。」

やばいな・・・ホントに流されてる・・・。

でも・・・

「じゃあ・・・あなたの新しい家が見つかるまで・・・なら。」

「ホント？」

「う、うん・・・あと・・・あなたが出て行きたくなるまで・・・。
」

「そんな事有り得ないよ。」

彼はそう言うとあははっと笑った。

「じゃ、よろしくね。凌子さん。」

「う、うん。よろしく。」

「あ、俺の事は綺羅人って呼んでね。」

こうしてあたしは“仔猫”のような彼・・・河合綺羅人くんをペットとして

飼うことになった。

―3―

かなり早い夕飯を食べた後、

「俺、駅のコインロッカーに荷物預けてるから

取りに言って来る。

でさ・・・合鍵もついでに作って来てもいい？」

と綺羅人が言った。

「あ、そうだね。合鍵ないと困るもんね。」

あたしは部屋の鍵を綺羅人に預けた。

「ありがと・・・じゃ、行って来る。」

「うん、いってらっしゃい。」

こんな風に誰かをこの部屋から送り出すのは何時振りかな？

あたしはふとそんな事を思いながら綺羅人を玄関で見送った。

2時間後――――。
綺羅人が帰ってきた。

「ただいまー。」

「おかえりー。」

そして、こんな風に玄関で誰かを出迎えるのも久しぶりだ。

――――時過ぎ、そろそろいつもの寝る時間になった頃。

「綺羅人・・・何やってんの？」

ベッドの中でにやにやしながらあたしを待ち構えている綺羅人を発

見した。

「何って、もちろん一緒に寝るんでしょ？」

「はぁっ！？」

「だって、俺可愛いペットじゃ～ん♪」

綺羅人はそう言って可愛らしい笑顔であたしの顔を見上げた。

う・・・

この笑顔・・・また流されそう・・・。

いやいやいやいやいやっ！

ダメでしょっ！？

「な、何言ってんのっ、綺羅人はソファーで寝るのっ！」

「えーっ！？」

「当たり前でしょっ！」

「俺、ペットなのにぃー？」

「普通のペットなら一緒に寝るけど、綺羅人は人間の男の子でしょっ。」

「えー、でも昨日は一緒に寝たじゃん？」

「そ、それは・・・綺羅人が離してくれなかったから・・・

と、とにかくっ、綺羅人はソファーで寝て。」

「どうしてもー？」

「どうしても。」

「はぁ～い・・・。」

綺羅人は渋々ベッドから出て、ソファーに寝転んだ。

「はい、コレ毛布。」

あたしが毛布を持っていくと無言で受け取り、
ガバッと頭からかぶった。

あらあら、拗ねちゃった。

でもねぇ・・・確かに昨日は一緒に寝たし、
あたしのベッドはダブルサイズだから綺羅人と一緒でも
狭くはないけど・・・
一応、“成人男性”だしね？

「おやすみ。」
あたしがそう言うと綺羅人は毛布をかぶったまま「おやすみ。」と
言った。

・・・クシュンッ！

綺羅人のくしゃみで目が覚めた。

何時だろう？

時計を見ると2時半。

寒いのかな？

綺羅人の方を見ると、やっぱり寒いのか毛布にくるまって丸くなっている。

ホント、猫みたい・・・。

季節は4月に入ったばかり・・・さすがに毛布一枚じゃ寒いよね・・

・。

そんな事を思っていると綺羅人がまたくしゃみをした。

しかも今度は連続３回。

このままじゃ風邪ひいちゃうな。

「綺羅人。」

あたしは綺羅人に近づいて小声で名前を呼んでみた。

「・・・ん・・・？」

綺羅人は寒くて半分目が覚めていたのか

あたしの声にすぐ反応した。

「ベッド入っていいよ。」

「・・・え、いいの・・・？」

「だって、寒いんでしょ？風邪ひいちゃう。」

「やった♪」

綺羅人は体を起こすと毛布にくるまったままベッドに入っていった。

そしてあたしもベッドに入ると、

「んー、やっぱベッドの中はあったかいなー。」

と気持ち良さそうに目を閉じたまま笑った。

「おやすみ、仔猫ちゃん。」

あたしがくすくす笑いながら言うと、綺羅人は

「おやすみ、ご主人様♪」

と言いながら少しだけ擦り寄ってきた。

こうして、あたしと人間だけど“仔猫”の綺羅人の生活が始まった。

―4―

―――翌日。

あたしは綺羅人と一緒にショッピングモールに買い物に来ていた。

綺羅人用の食器とか生活雑貨を揃える為。

“綺羅人の新しい部屋が見つかるまで”

後は・・・

“綺羅人が出て行きたくなるまで”

という約束だけど、いつになるかわからないし、

一応ペットだしね。

４階でだいたいの食器買った後、お風呂で使うシャンプーを買う為
２階の売り場に向かった。
別にあたしのシャンプーを一緒に使ってもいいんだけど、
綺羅人は癖毛で猫っ毛だからかシャンプーには拘っているらしい。
昨夜はあたしのシャンプーをとりあえず使ったから
思うようにヘアスタイルが決まらなかったらしい。
今日は髪の毛を隠すように深くキャップを被っている。

下りのエスカレーターに乗ろうと、とあるお店の前を通った時、
ちらりと碧い石があしらわれたチョーカーが目に入った。
天然石を使ったアクセサリーや雑貨のお店だ。
綺麗な石・・・ラピスラズリかな？

「これ、綺麗だね。」

綺羅人もそのチョーカーが目に入ったのか、

あたしが何も言わなくても二人ともそのお店に入っていた。

黒い革紐の先にシルバーのパーツ、そしてそのパーツの中に

ラピスラズリが入っている。

「綺羅人、コレ気に入った？」

「うん、綺麗だし可愛い。」

「じゃあ、プレゼントしてあげる。」

「えっ！？ホント？いいの？」

「うん、飼い猫には首輪がいるでしょ？」

あたしがそう言ってにやりと笑うと、

綺羅人は可愛らしい笑顔を返してきた。

綺羅人のシャンプーを買って、時計を見るとちょうど3時だった。

1階にあるカフェで3時のおやつがてら休んでいこうと

お店に入ると、よく知った顔があった。

・・・克彦さん・・・。

その人は3ヶ月前に別れたあたしの元不倫相手・三浦克彦さんだった。

5歳年上であたしの会社と取引がある大手の家具メーカーの営業マン。

おなかがふっくらした奥さんと一緒にいる。

「・・・。」

なるべく目を合わさないように、顔を見られないようにしながら

目の前を通り過ぎた。

そして、ウェイトレスに案内されたテーブルにつき、

ちらりと克彦さんを見ると・・・

まったくあたしには気がついていない様子だった。

・・・よかった・・・。

あたしは少しホッとしながら、克彦さんと奥さんの

幸せそうな笑顔に胸が痛んだ。

3ヶ月前――――。

突然、彼・克彦さんから急に呼び出された。
あたしは嫌な予感がした。
そしてその嫌な予感は見事に当たった。

『別れて欲しい。』

克彦さんの口から出てきた言葉はあたしが予想していた通りの言葉だった。
子供が出来ないと思い込んでいた奥さんに子供ができた。
だから、別れて欲しいと言われた。

あたしも奥さんから克彦さんを奪い取るつもりもなかったし、
克彦さんとは結婚なんて事も考えていなかった。
いつまでもこんな事続けてちゃいけない・・・
そう思っていたからすんなり別れる事に決めた。

それに自分では克彦さんの事はそんなに“愛してる”とは思っていなかった。

けど・・・

“愛してはいなかった”けど、“好き”だった。

だから、克彦さんが帰った後、一人で自棄酒してたんだよねー。

「凌子さん、首輪つけてー。」

しばし物思いにふけっていると綺羅人が目をくるくる輝かせて言った。

「・・・ん？・・・うん。」

その声に現実に引き戻され、慌てて返事をした。

さっき買ったばかりの“首輪”を綺羅人につけてあげていると

「凌子さん、いい匂いする。」

と、あたしの首元に鼻を近づけた。
綺羅人の鼻先があたしの首筋に当たった。
「あはは、くすぐったい。」
「なんの香水？」
「ミントをベースにしたあたしのオリジナル。」
「オリジナル？」
「うん、前にねイタリアに出張に行ったときに自分だけの
香水を作ってくれるお店を見つけてね、作ってもらったの。」
「へぇー。」

「で、その香水が気に入っちゃったから、なくなったらそのお店から送ってもらってるの。」

「凌子さんらしい優しい香りだね。」

「そう？」

「うん、俺、この匂い好き。」

「・・・そういえば、綺羅人は香水つけてないんだね。」

「うん、俺は何もつけないかな。」

克彦さんはいつもシャネルのエゴイストをつけていた。

その香りに包まれる事に慣れていたあたしは綺羅人から微かに香る

ボディーシャンプーの匂いが新鮮だった。

「そういえば、凌子さんていくつ？」

「２８歳。」

「意外にすんなり答えるんだね。もっと言い渋るかと思った。」

綺羅人はあたしがさらりと答えたのが意外だったらしい。

「言い渋ったところで若返るワケじゃないしねー。」

あたしがそう言うと綺羅人はプーッと吹き出した。

「まぁ、そりゃそうだけど。・・・てか、凌子さんて

俺と同じ年くらいかと思ってた。」

「綺羅人は？何歳？」

「２５。」

「えっ！？」

うそぉ～っ？

「む？その反応は・・・凌子さん、俺の事いくつだと思ってたの？」

「２２，３かと・・・。」

「えーっ、それって俺がガキっぽいってコト？」

「べ、別にそういうワケじゃ・・・」

「はぁ・・・、傷つくなぁ・・・。」

「いや、でもほらっ、若く見られるのはいい事じゃない？」

「俺は年相応に見られたいけどな。」

そう言って口を少し尖らせた綺羅人の顔はやっぱり“可愛い仔猫ちゃん”だった。

―5―

―――ピピピピピピピピピピピ・・・

翌朝、いつものように目覚まし時計の音で目が覚めた。

「っ！？」

目を開けると、綺羅人の顔がすぐ目の前にあった。

「おはよう、凌子さん♪」

綺羅人は朝からにこにこしている。

「お、おはよう・・・て、綺羅人何してんの？」

てか、顔・・・近くない？

「凌子さんの寝顔見てたの。」

「・・・。」

「凌子さんの寝顔かわいい♪」

「・・・。」

可愛いって・・・綺羅人の方が“可愛い”と思うけど?

さて、そんな事より起きなくちゃ。

あたしはベッドから出て洗面所に行った。

すると綺羅人も後ろからついてきた。

「綺羅人も起きるの?」

「うん。」

「まだ寝ててもいいよ? 朝ごはんなら作って冷蔵庫に入れておくし。」

「ううん、一緒に食べる。」

綺羅人はあたしと一緒にシャカシャカと歯磨きをし始めた。

そして洗面所から出て、あたしが朝食を作り始めると

何も言わなくても食器を用意していた。

綺羅人、こういうのに慣れてるな。

なんとなくそう思った。

別にたいした事でもないんだろうけれど。

「あ、そうだ、お昼は冷凍庫にご飯があるからそれを解凍してね。

それとおかずは・・・どうしよ・・・。」

「お昼は適当になんか自分で作るから心配しなくていいよ？」

あたしがおかずの心配をしていると意外にも綺羅人は自分で作ると言った。

「綺羅人、料理出来るの？」

「まぁ、多少は・・・」

「そっか・・・じゃ、大丈夫そうね。」

あたしがそう言うと綺羅人は「うん。」と言ってにっこり笑った。

朝食を済ませて部屋を出る時、綺羅人が玄関まで見送りに来てくれた。

「いってらっしゃい。」

「行ってきます。」

あたしが手を振ると綺羅人は可愛らしい笑顔でバイバイと手を振ってくれた。

こんなペットなら飼って正解だったかも。

綺羅人のおかげで上機嫌で出社して、朝のミーティング。

部長から新しい企画の担当者の振り分けが伝えられた。

あたしの会社はインテリアのコーディネートを専門にやっていて、

あたしはそこでインテリアコーディネーターの仕事をしている。
飲食店のテーブル、イス、食器類を揃えたり、
住宅展示場の部屋の中をコーディネートしたり。
今回の企画も、とある住宅メーカーの展示場のコーディネート。
企画書に目を通すと使用する家具類は全て提携している
家具メーカーの物にするらしい。

克彦さんの会社かな？

そう思っていると、やっぱりそうだった。
そして、担当者の欄に克彦さんの名前があった。

よりにもよって克彦さんが担当者かー・・・。

気が重いな・・・。

せっかく今日は朝から気分がよかったのに・・・。

でも、仕事だから仕方がない。

いくら別れたとは言え、仕事に私情を挟むのは自分としても嫌だし。

そして、さっそく克彦さんの会社で打ち合わせ。

午後一番で同期の奥田くんと一緒に克彦さんの会社に出かけた。

あたしと奥田くん、克彦さんと一緒に

ミーティングルームに入って打ち合わせをしていると

奥田くんの携帯が鳴った。

「すみません、ちょっと失礼します。」

奥田くんは携帯を持ってミーティングルームの外へ出た。

すると、克彦さんは二人きりになるのを待っていたかのように
口を開いた。

「凌子。」

「・・・。」

取り残されたあたしは克彦さんと二人きりになって
ものすごく居心地が悪かった。

だから、克彦さんに“凌子”と呼ばれても返事をしなかった。

「昨日、一緒にいた男・・・誰なんだ？」

「っ！？」

昨日？

あたしと綺羅人が克彦さんと同じカフェにいたの気付いてたの？

「彼氏？」

「・・・・。」

「凌子。」

「・・・プライベートな事ですから、お答えする必要はないと思います。」

あたしが冷たい口調で言い放つと克彦さんは顔を顰めた。

「答えろよ。」

「・・・・。」

「凌子っ。」

克彦さんが少しだけイラついているのが声でわかった。

そしてしばらくの沈黙の後―――。

電話を終えた奥田くんが戻ってきた。

あたしがホッとしていると、克彦さんは何もなかったような顔で打ち合わせを再開した。

―6―

「ただいまー。」

「おかえりー。」

夜、仕事から帰ると綺羅人が出迎えてくれた。

疲れていたあたしはその可愛い笑顔になんだかちょっと癒された。

部屋着に着替えた後、エプロンをつけて夕食を作ろうと

キッチンに立つと、やけに綺麗に片付いていた。

「・・・・。」

「どうかしたの？」

キッチンを見つめたまま動かないあたしに

綺羅人は不思議そうな顔をした。

「なんかすごい綺麗に片付いてるなぁーと思って。」

「そぉ？普通に片付けたつもりだけど？」

綺羅人は至って普通に言っているけれど

実際あたしが片付けるよりは綺麗になっていると思う。

だって、あたしがいくら磨いても落ちなかった

フライパンの焦げ付きも落ちてるし。

お昼ごはんを食べた後の食器もそのままにしてるかと思っていたのに、

ちゃんと洗って仕舞ってある。

もしかして作らずにコンビニにでも行って

お弁当かなんか買ったのかな？と、思ったりもしたけれど

冷蔵庫の中の食材が微妙に減っている事や、

ゴミ箱の中にそんな形跡がないという事はやっぱり作ったんだろう。
しかも、なんだか包丁の切れ味もよくなっている。
研いである・・・。

「凌子さん、携帯鳴ってるよー？」
着信音に気付かないまま夕食を作っていたあたしに
綺羅人が言った。

「あ、うん。ありがと。」
綺羅人が持ってきてくれた携帯を受け取り、
着信表示を確認すると、奥田くんからだった。
なんとなく、ホッとした。

昼間の事もあるし、一瞬、克彦さんかな・・・？と、思ったから。

「もしもし。」

『もしもし、お疲れ様。奥田です。

明日の事なんだけど、ちょっと急に朝一で打ち合わせが

入っちゃってクライアントの所に行ってから、その後出社するから

一ノ瀬さんのとミーティング午後にずらしてほしいんだけど、い

いかな？』

「うん、あたしは明日ずっと社内にいる予定だから構わないわよ。」

『よかった。じゃ、そういう事で。』

「了解。」

「そういえば俺、まだ凌子さんの携帯教えてもらってないかも。」
電話を切った後、綺羅人が思い出したように言った。

「あー、そういえばそうだね。」

「急いで連絡取りたい時とかあるかもしれないから、
後で教えてー。」

「うん、わかった。」
あたしはそう返事をした後、そういえば綺羅人は携帯を
持っていないんだろうか？と思った。
あたしの前で携帯で誰かと話していたり、
そもそも携帯自体見た事がない。

まぁ、帰る所もないって言ってるくらいだから
持ってなくても・・・て、それならなおさら
持ってないと困らないだろうか？

「凌子さん？」

ごちゃごちゃと考えていると綺羅人が
あたしの顔を覗き込んできた。

「え？な、何？」

思ったよりも綺羅人の顔が近くにあった。

ちょっと焦った。

「早くひっくり返さないとヤバいよ？」

綺羅人はハンバーグを焼いているフライパンを指差した。

「あっ！」

慌ててハンバーグを返すと結構な焦げ目が付いていた。

「あー、ごめん・・・。」

「あはは、大丈夫、こんなの許容範囲だよ。」

あたしのがっかりした声に綺羅人はニッと笑いながら言った。

「でも、よくわかったね。」

実際、キッチンに立って焼いていた訳じゃないのに

ハンバーグが焦げるのがどうしてわかったんだろう？

「うん、だいたいの時間でね。」
綺羅人はそう言うと手際よく二人分の食器を並べた。

「うまそー♪」
ハンバーグも焼き上がり、料理をテーブルの上に並べると
綺羅人はまるで子供みたいな顔で言った。
こういう表情を見るとやっぱりとても25歳だなんて思えないよね。

「いただきまーす♪」
その言葉と同時に綺羅人はまだ熱々のハンバーグを
口に入れた。

「猫みたいだけど、猫舌じゃないんだ？」
あたしがクスクス笑いながら言うと綺羅人は

「うん。俺、全然猫舌じゃないよ。」

と言った。

でも、その表情は仔猫そのもの。

そして、にんまり笑って

「んー、おいしー♪」

と言った表情もやっぱり猫が餌貰って喜んでるみたいだった。

あたしはふと克彦さんと付き合っていた時の事を思い出した。

克彦さんとはこうして一緒に食事をすることはなかった。

だって、いつも帰ってから奥さんと食事をしていたから。

こんな風に目の前で「おいしい。」って言ってくれるのは

嬉しいな・・・。

―７―

―――それから一ヶ月。

例の住宅メーカーとの企画で段々遅く帰る日も多くなった。

そして、今日は大詰めを迎え、一段と遅くまで残業をしていた。

昨日まではなんとかギリギリ綺羅人が

我慢できそうな時間までに帰ってご飯も作っていたけど、

今日は本当にに遅くなりそうだ。

もうすでに１０時を回っているし、あたしはともかく、

綺羅人に先にご飯食べててもらおうかな。

一回コールして、一度電話を切ってからもう一度コールする。

それがあたしからの電話だっていう合図。

『もしもし。』

「もしもし、あたし。」

『うん。』

「あのね、今日はまだ帰れそうにないから、
先にご飯済ませててくれる？」

『うん、わかった。』

「ごめんね、もっと早く連絡できればよかったんだけど、
ちょっと忙しくて・・・」

『いいよ、気にしないで。』

「うん・・・。」

あ、でも・・・

「そういえば、冷凍庫にストックのご飯まだ残ってたっけ？

あと、食材も・・・」

『あはは、そんなの気にしなくていいよー。』

食事の心配をするあたしに綺羅人は笑いながら、

大丈夫だと言った。

「う、うん・・・。」

『あ、ホラ、仕事忙しいんでしょ？

俺の事は心配いらないから。

仕事頑張ってね。』

そして、綺羅人は優しい声でそう言ってくれた。

「うん。」

あたしはその言葉にちょっとだけ癒された。

だって・・・こんな風に言ってくれるペットなんて、

世界中どこを捜したっていないよねぇっ？

「よっし！これでまだ頑張れそーっ。」

電話を切った後、携帯を閉じて思いっきり伸びをして、

あたしは自分のデスクに戻った。

――――それから数時間後。

「・・・し、死ぬ・・・。」

結局、あたしがマンションに戻ったのは午前1時を回った頃だった。

綺羅人、もう寝てるかな？

・・・カチャン――――。

綺羅人を起こさないようにそっと鍵を開けて中に入ると

部屋の灯りがついていた。

そして、リビングのドアから「おかえり。」と綺羅人が顔を出した。

「あれ？まだ起きてた？」

「うん。」

綺羅人はまるでご主人様の帰りを待ち侘びていた猫みたいに

あたしに近寄ってきた。

「凌子さん、ご飯ちゃんと食べた？」

「ううん、結局食べ損ねちゃった。」

「じゃあ、おなかすいてるんじゃない？」

「うん・・・、死にそう・・・。でも、ガッツリ

食べたい気分じゃないし・・・。」

「リゾットとかは？」

「あ、それなら食べられそう。」

「じゃ、先にお風呂入って着替えておいでよ。

その間に俺、作るから。」

「えっ!?」

「ほら、早く。」

「あ・・・うん。」

あたしは綺羅人に言われるがままバスルームに行った。

“その間に俺、作るから。”

て、綺羅人作れるのかな?

レトルトのリゾットとか買い置きなんてしていないし・・・。

「グッドタイミング、今ちょうど出来たトコだよ。」

お風呂からあがってリビングに行くと綺羅人がそう言いながらにっこり笑った。

そして、お皿にリゾットを盛り付けパセリのみじん切りを散らした。

「うわぁ、おいしそうっ。」

鮮やかなトマトの赤い色にパセリのグリーンが良く映える、

その綺麗な色彩のトマトリゾットは疲れた体を目から癒してくれそうだった。

「いただきまーす。」

「どうぞ。」

綺羅人はエプロンを外してあたしの目の前に座り、
にこにこしながら言った。

「おいしいっ。」

「ホント？」

「うん、お店の味みたい。綺羅人ってこんなに料理上手かったんだ？」

「普通だよ。」

「えー、でも、あたしこんなに上手に作れないもん。」

「そぉ？」

「だって味はもとよりご飯の固さも完璧だし。」

綺羅人のリゾットは見た目、味、食感共に完璧だった。

でも、綺羅人はいまいち自信がないのか、嬉しそうな顔はするもののいつもみたいに目をくるくる輝かせていなかった。

―8―

「・・・子さん。」

昨夜、かなり遅い時間に帰って綺羅人が作ってくれた

リゾットを食べた後、疲れてベッドへダイブした。

さっき目を閉じたばかりなのに、

なんであたしを起こそうとするの？

「・・・凌子さん。」

なかなか目を開けないあたしの耳元で綺羅人の優しい声がする。

「凌子さん、早く起きないと遅刻しちゃうよー？」

そう言って綺羅人はあたしの頬をツンツンした。

「・・・んー・・・？」

薄っすらと目を開けるとエプロン姿の綺羅人の顔が
目の前にあった。

「・・・っ！？」

驚いてガバッと体を起こすと綺羅人が「おはよう。」と
満面の笑みで言った。

「お、おはよ。・・・て、もう朝っ！？」

「うん、そうだよ。朝御飯、もうすぐ出来るから、
先に顔洗っておいでよ。」

綺羅人はそう言うとキッチンに向かい、トーストを焼き始めた。

「これ、綺羅人が作ってくれたの？」

顔を洗ってキッチンに行くと、ダイニングテーブルの上に
焼きたてのトーストとプレーンオムレツ、オニオンスープが
用意されていた。
トースト、オムレツ、スープ・・・どれも見た目は完璧。
どこかのお店のモーニングセットみたい・・・。

「昨夜、遅かったし疲れてたみたいだから少しでも
寝てたいだろうと思って。」

「ありがとー、綺羅人。」

「ご主人様を助けるのはペットのお仕事♪」
綺羅人はそう言ってあたしの目の前に座ると
早く食べてみてと言わんばかりの顔をした。

「いただきます。」

プレーンオムレツにフォークを入れると

とろんと中からフルフル卵が出てきた。

そしてソースをつけて口に入れるとふわふわの卵が

口の中で広がってすぐに消えていった。

「おいしいー♪」

特に変わったメニューでもないし、

贅沢な食材を使っているワケじゃない。

それなのになんでこんなにおいしいんだろう？

綺羅人はあたしの顔をじっと見つめ、

小さく笑った。

それから、一ヶ月後――――。

夜7時、例の克彦さんと組んで進めていた住宅メーカーの仕事も

なんとか無事に終わり、いつものように会社を出ると

携帯が鳴った。

「もしもし、一ノ瀬です。」

『もしもし、マセキ家具の三浦です。』

克彦さんからだ。

でも、“マセキ家具の三浦です。”と名乗ったという事は

仕事の話だろう。

「お世話になっています。」

『お世話になってます。突然なんですが一ノ瀬さん、
今からお時間ありますか？』

「はい。大丈夫です。」

『では、申し訳ないんですが・・・今から
大手町のグラヴィーアホテルに来て頂けますか？』

「グラヴィーアホテルですか？」

『はい、ちょっとこの間のトキモトハウスとの企画の件で
先方よりグラヴィーアホテルで再度打ち合わせがしたいと
連絡がありまして。』

“トキモトハウス”とは、例の住宅メーカーだ。

「何か、問題が起きたんですか？」

『私もよくわからないのですが、そのホテルの室内を参考にしながら
と言うことですので・・・今から来ていただけませんか？』

「はい、わかりました。」

『奥田さんの方には、別件でお伝えする事がありますので
私の方から伝えておきます。
部屋の方は後からメールします。』

「はい、ではとりあえず向かいますね。」

企画が一段落して、後からやっぱりこうしたいとか、
ああしたいとか言い出すのは今までもない訳じゃなかった。
住宅メーカーの人がたまたまグラヴィーアホテルの
室内を目にしてピンと来た物を見つけたのかもしれない。

あたしはグラヴィーアホテルに向かう途中、
綺羅人に電話した。

「もしもし、綺羅人？」

『うん。』

「ごめん、急に打ち合わせがはいっちゃって・・・
そんなに遅くならないとは思うんだけど、

おなかすいて我慢できなかったら先に食べててね。」

『うん、わかった。』

あれから、綺羅人はあたしが仕事で遅くなったり、
疲れて朝起きられない時は、食事の用意をしてくれるようになった。
最初はあたしの反応をすごく気にしていた。

でも、「おいしいよ。」とあたしが言うと
すごく嬉しそうな顔をするようになった。

———グラヴィーアホテルに着いて、克彦さんから
メールで知らされた部屋のインターフォンを鳴らすと
すぐに克彦さんが出てきた。

こんな風にホテルで会うのは何ヶ月ぶりかな・・・？

ふと、そんな事を思った。

尤も、克彦さんとホテルで会うときは“恋人”として会っていたワケだけど。

部屋の中には克彦さんしかいなかった――――。

「あの・・・他の方は？」

住宅メーカーの担当者も奥田くんもいない。

・・・？

まだ来てないのかな？

「三浦さん？」

克彦さんはあたしの問いには何も答えないまま、

ゆっくりとあたしに一歩近づいた。

―9―

あたしは克彦さんにぎゅっと抱きしめられた――――。

「か・・・三浦さんっ！？」

「ごめん・・・嘘なんだ・・・・。」

「・・・・。」

克彦さんの言葉の意味がどういう事なのか・・・・

なんとなくわかった。

「ごめん・・・・。」

消えそうなほど小さな声で言った克彦さんはとても弱々しく感じた。

「どうして・・・・？」

「・・・・。」

「・・・克彦さん？」

「・・・・。」

克彦さんは結局、あたしの質問には答えてくれなかった――――。

ただ、あたしをずっと抱きしめたまま・・・・。

こんな克彦さんを見たのは初めてだった。

いつも自信に満ち溢れていて、あたしには

弱い部分なんてまったく見せなくて・・・。
ホテルで会う時だって抱きしめられた後は
すぐにキスとかしてきていたのに今は何もして来ない。

それはもう二人の関係が数ヶ月前に
終わっているからというだけじゃない気がした。

まるで・・・

「克彦さん、何か・・・あったの？」
克彦さんの香水の香りに包まれて、
克彦さんの腕に抱きしめられたまま聞いた。

「・・・なんでもないよ。」

嘘・・・。

「だったら・・・どうして？」

「ホントに、なんでもないから・・・。」

「・・・。」

あたしはそれ以上、何も聞けなかった。

ただずっと抱きしめられたまま

克彦さんの腕が離れるのを待った。

「ごめん・・・ちょっと急に会いたくなっただけだから。

もう二度と、こんな事しないよ。」

しばらくして克彦はあたしの体から腕を離すと、

申し訳なさそうな顔で小さく笑った。

克彦さんはなんでもないと言ったけれど、

何か隠しているような気がした。

「克彦さ・・・」

「彼氏、待ってるんだろ？」

もう一度だけ何かあったのか聞こうとあたしが口を開くと

それを制するように克彦さんは言った。

彼氏じゃないけど、綺羅人が待っていることは事実だ。

「・・・。」

あたし・・・このまま帰ってもいいのかな？

「ほら、早く帰らないと彼氏に怒られるぞ？」

克彦さんはそう言うとあたしを部屋の入口まで送ってくれた。

「じゃ。」

そう言って克彦さんが部屋のドアを閉める瞬間、

優しい笑顔が消えて、すごく哀しそうな目をしたのが一瞬見えた。

「か・・・」

パタン――――・・・

名前を呼ぶ前にドアが閉まった。

「・・・。」

なんだったんだろう・・・。

あたしは後ろ髪を引かれる思いで踵を返した――――。

「ただいま・・・。」

ホテルを出た後、途中で買い物をして

部屋に着いたのは午後9時過ぎだった。

「おかえり。」

綺羅人はリビングから出てくると

あたしが持っている買い物袋を持ってくれた。

すると、綺羅人は買い物袋を持ったまま立ち止まった。

「綺羅人？どうしたの？」

「・・・あ、ううん。なんでもない。」

少しだけ曇った表情をしていた綺羅人はすぐにまた

いつもの可愛らしい笑みを浮かべた。

なんか今日はみんなおかしいよ・・・？

なんなの？

一体・・・。

克彦さんといい、綺羅人といい・・・。

―――翌朝。

打ち合わせで克彦さんと同じマセキ家具の別の担当者と
クライアントの所に直行する予定のあたしは
綺羅人といつもよりかなり遅めの朝食を摂っていた。

・・・～♪♯～♪♪～♪♭♪～♪～♪♪―――

「ん？」

携帯が鳴っている。

会社からの着メロだ。

「もしもし。」

『もしもしっ、一ノ瀬さん？』

あたしが携帯に出ると相手はすぐに慌てた口調で
喋り始めた。

「あ、奥田くん？おはよう。どうしたの？」

『一ノ瀬さんっ、三浦さんが・・・マセキ家具の三浦さんが
亡くなったって・・・っ。』

・・・っ！？

―10―

「・・・え・・・・？」

今、・・・なんて・・・・？

『昨夜、大手町のグラヴィーアホテルで
薬を大量に飲んで倒れてたところをホテルの
従業員が発見したって・・・・』

嘘・・・・

昨夜って・・・・あの後・・・・？

あたしが帰った後に・・・・？

『それで・・・・すぐに病院に運ばれたらしいんだけど

今朝、亡くなったって、さっき、マセキ家具の方から知らせがあった。

それで、今からこの後一緒にクライアントの所行く予定だったのを明日にずらして欲しいって言われたからとりあえず会社の方に来て。

それと部長が俺と一ノ瀬さんで今夜、三浦さんの通夜に行ってくれって。』

「・・・わ、わかった・・・・。」

やっぱり・・・昨日、様子がおかしかったのは・・・

――――電話が切れた後も、あたしはしばらくその場から動けないでいた。

「凌子さん?」

すると、綺羅人があたしの様子に心配そうな顔をした。

「凌子さん、どうしたの？顔色悪いよ？」

克彦さんが死んだ・・・。

あたしがあの時、もっとちゃんと克彦さんに聞いていれば・・・

「大丈夫？」

あたしがもっと・・・

「凌子さんっ？」

綺羅人は慌ててティッシュの箱から何枚もティッシュを出し、

あたしの頬を流れる涙を拭った。

あたし、泣いてるの・・・？

――その夜。

奥田くんと一緒に克彦さんの通夜に行った。

場所は克彦さんの実家の近くの葬儀場。

喪主の席には克彦さんのお父さんと思われる男性が座っていた。

奥さんが喪主じゃないんだ？

しかも、奥さんの姿もない。

・・・？

ショックのあまり、体調でも崩されたのかしら？

「三浦さん、３日前に離婚したらしい。」

周りに聞こえないようにそう囁いたのは奥田くんだった。

「えっ。」

離婚て・・・

「三浦さんのところ二週間前、お子さんが生まれたでしょ？」

「う、うん。」

克彦さんとはよく一緒に仕事をしていた事もあって

個人的にも親しくなっていたから先日、奥田くんと出産祝いを贈った。

長男が生まれたって言ってすごく喜んでいた。
だから克彦さんがなぜ自殺したのかもまるで見当がつかなかった。

「その子、三浦さんの子じゃなかったらしい。」

っ！？

「・・・どういう、事？」

「赤ちゃんが生まれて血液検査した時に、
三浦さんの血液型と奥さんの血液型からは
生まれないはずの血液型だったらしいんだ。」

それって・・・

「奥さん、浮気してたらしいよ。」

ダブル不倫？

「長い間、子供が出来なくて悩んでたって言ってたけど
問題は奥さんじゃなくて三浦さんにあったらしい・・・て、
今、そこで近所の奥様連中が話してるのが聞こえた。」

「そ、そう・・・なんだ。」

奥さんがこの場にいないのも、喪主がお父さんなのも納得できた。

「裏切られてたのがショックで三浦さん、自殺したのかなぁ・・・？
だとしたら、俺はその奥さんの事、許せないな。」

静かな口調だけど奥田くんの言葉には怒りが込められていた。

あたしは何も言えなかった・・・。

いくら奥さんも不倫してたとは言え、克彦さんと一緒に

奥さんを裏切っていた事は事実だから。

克彦さんのお通夜が終わって奥田くんと別れた後、駅の改札を出ると

「凌子さん。」と、呼ばれた。

「・・・綺羅人っ！？」

キャップを深く被っていたから一瞬、誰だかわからなかったけど

“首輪”で綺羅人だとわかった。

「どうしたの？」

「迎えに来た。」

コンビニにでも行ったついでかな？

「なんか・・・今朝、様子がおかしかったから・・・、気になって。」

「わ、わざわざ・・・？」

「ん、まぁ。」

綺羅人はそう言うと「帰ろ。」とあたしの通勤鞄を持ってくれた。

部屋に帰ってみると綺羅人は夕食まで作ってくれていた。

でも、食欲なんてあるはずもない。

「食べられるトコまでいいから、食べて？」

綺羅人には仕事で付き合いのある人が亡くなったとしか言っていない。

それなのに、今朝のあたしの様子が余程気になるのか

すごく気を使ってくれている。

「綺羅人、ありがと・・・。」

「・・・うん。」

綺羅人は小さく笑った。

そしてその夜、あたしはベッドには入ったものの、

結局、眠れずにいた。

すると、綺羅人があたしに腕を伸ばし、
ぎゅっと抱きしめてくれた。

「テンピュールより気持ちいいでしょ？」
綺羅人は少し冗談ぽく言って頭を撫でてくれた。

そうして、朝までずっと――――、
あたしを抱きしめていてくれた。

―11―

―――翌日。

昨日と同じ様に綺羅人が駅の改札まで迎えに来てくれていた。

そして、昨日と同じ様に夕食も作ってくれていた。

夕食を済ませた後、ポストから取り出しておいた郵便物に

目を通していると、ダイレクトメールに混じって

宛名が手書きの封筒があった。

その薄い水色の封筒の文字には見覚えがある。

克彦さんの字だ。

封筒を手に取り、裏側を見ると

差出人の名前は書かれていなかった。

あたしは恐る恐る封筒を開け、手紙を開いた。

――――――――――――――――――――――――――――――

凌子へ

この手紙が恐らく最後の手紙になるだろう。

そして、この手紙を君が読んでいる頃には俺はこの世から

いなくなっていると思う。

君を騙して急に呼び出した事、すまないと思っている。

でも、来てくれて本当にありがとう。

最後に君に会えて嬉しかった。

このまま君の温もりと香水の香りが残っているうちに逝くよ。

今までありがとう。

もっと早く、凌子に出会いたかった。

幸せに。

克彦

P.S

この手紙は読んだら捨ててくれ。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

決して長くはない手紙・・・

その中には昨日、奥田くんから聞いたような事は書かれていなかった。

奥さんも浮気していたとか、生まれてきた子供が
自分の子ではなかったとか、不妊の原因とか・・・

ただ、“ありがとう。”と・・・
“もっと早く、凌子に出会いたかった。”・・・
その言葉がすごく、すごく・・・あたしの心の中に入り込んできた。

あの時、克彦さんがあたしを抱きしめたまま動かなかったのは
死ぬ事をすでに決意していたから・・・？

克彦さんは最期にあたしを呼んだ・・・。

奥さんではなく、あたしを呼んだ――――。

「凌子さん・・・？」

綺羅人が少し遠慮がちにあたしに手を伸ばした。

どうして、もっとちゃんと克彦さんの話を聞かなかったんだろう？

「綺羅人・・・どうしよう・・・あたし・・・」

「凌子さんっ？」

あたしは綺羅人に全てを話した――――。

泣きながら、自分でも何言ってるのか途中でわかんなくなっても

綺羅人はずっと黙ったまま、あたしの話を聞いてくれていた。

「あたし・・・克彦さんの様子がおかしいって気付いたのに、
・・・克彦さんを止められなかった・・・。
あたしが、あの時あのまま克彦さんの所にいたら・・・」

「凌子さんは、その人の所に戻りたかったの？」

「それは・・・」

「もし・・・その人が凌子さんにやり直そうって言ってたら
凌子さんはどうしてた・・・？
・・・その人の所に戻ってた？」

あの時、もし克彦さんがあたしとやり直そうって言ってたら？

あたしは・・・どうしてたんだろうか・・・？

・・・戻ってたのかな？

「・・・・。」

「・・・・。」

綺羅人は黙ったままあたしの答えを待っていた。

「・・・・。」

それでも答えが出てこない。

「じゃ、質問変える。凌子さんはその人の事・・・愛してたの？」

しばらくの沈黙の後、綺羅人は真っ直ぐにあたしの目を見つめた。

「・・・ううん。」

「・・・・。」

首を横に振って答えたあたしに綺羅人は少し驚いていた。

「克彦さんと初めて会ったのは2年前、仕事の関係でね。

その頃、あたしは結婚まで考えてた恋人と別れたばっかりで、

・・・克彦さんもちょうど子供が出来ない事で奥さんと

ちょっとギクシャクしてて・・・、

段々親しくなって一緒によく飲みに行くうちに

克彦さんとそういう関係になったの・・・。

・・・だから、お互い傷を舐め合ってただけなんだって

あたしはずっとそう思ってて、好きだったけど愛せなかった・・・

。」

「それなら・・・もし、凌子さんとやり直す事になったとしても、
愛していないなら・・・うまくいかなかったと思う。
どんなに愛されてても自分がその人の事を愛する事が出来なきゃ、
お互い傷つけ合うだけだよ・・・。
それがわかってるから、何も言わなかったんだと思う。
だから、凌子さんがあのままその人のところにいたとしても
結果は同じだったと思うよ・・・？」

綺羅人の言葉は妙に説得力があった。

「最後に凌子さんが来てくれて嬉しかったんだと思う。
それに、凌子さんには本当に幸せになって欲しいから
手紙の封筒に差出人の名前も書かなかったし、
読んだ後に捨ててくれって書いたんだよ。
変に波風が立たない様に。」

綺羅人はあたしが泣き止むと軽く息を吐き出した。

「一昨日、凌子さんが急に打ち合わせが入ったって言って、

帰って来た時に、いつもの香水とは別の香水の香りが

少しだけしたから、もしかして誰かと二人きりで会ってたのかな？

て、思ってた・・・。」

え・・・？

「俺、もう凌子さんと一緒にいるの無理なのかな？・・・て、

そんな事ばっかり考えてた。」

「綺羅人・・・？」

「まだ、ここにいてもいい・・・？」

「・・・当たり前でしょ？」

あたしが克彦さんと会って帰って来てから綺羅人はずっと不安に思ってたんだ・・・。

それなのに、あたしに気を使ってくれていた・・・。

―12―

それから綺羅人は毎晩駅まで迎えに来てくれるようになった。

朝食も夕食もずっと作ってくれている。

寝る時もあたしをぎゅっと抱きしめてくれる。

あたしはずっとそれに甘えていた。

「綺羅人、ごめんね。いろいろありがとう・・・。」

あたしがそう言うと綺羅人はいつも笑ってくれていた。

そして「俺、ちゃんと凌子さんの事、癒してる?」と必ず聞く。

「うん・・・、すっごく癒されてるよ。」

その言葉に嘘はない。

実際、克彦さんの自殺から一ヶ月近く経った今、

以前のように少しずつ笑えるようになってきた。

でも、克彦さんからのあの最後の手紙はまだ捨てていない。

引き出しの奥にずっと仕舞ってある。

捨てるには・・・もう少し時間がかかりそうだ。

週末、金曜日―――。

いつものように駅まで迎えに来てくれた綺羅人と

マンションに向かって歩いていると

「ねぇ、凌子さん。明日、デートしない？」

と綺羅人が言った。

「デート？」

「うん、たまには映画とか観に行かない？」

「映画かぁー・・・そういえば最近全然映画館に行ってないかも。」

「凌子さんはどんな映画が好きなの？」

「んー、基本的には恋愛映画かなー。

でも、アクションとかＳＦとかファンタジーも好きだよ。

あ・・・でも、ホラーは苦手だけど。」

「あはは、俺もホラーはちょっとなー。

じゃあさ、今ちょうどおもしろそうなＳＦ映画やってるから

それ見に行こうよ。」

綺羅人はそう言うと目をくるくると輝かせた。

多分、綺羅人がこんな風にあたしを“映画デート”に誘うのも
克彦さんの事でまだ完全に立ち直っていないあたしに
気を使ってくれているんだろう。

「うん。」

あたしがそう返事をすると綺羅人は「やった♪」と嬉しそうに笑った。

———翌日。

綺羅人と一緒に外でランチをした後、映画館に向かっていると
反対側の歩道に見覚えのある顔があった。

ベビーカーを押しながら、仲良くゆっくりと歩いている夫婦らしき二人。

克彦さんの奥さん・・・いや、元奥さんだ。

隣にいる男性がおそらく不倫していた人・・・

赤ちゃんの父親なんだろう。

あんな二人の幸せそうな姿は見たくなかったな・・・。

そう思っていても、つい目で追ってしまう。

「どうしたの？凌子さん。」

不意に頭上から綺羅人の声がした。

「あ、ううん・・・なんでもない。

なんか、知り合いに似てる人がいたんだけど

違ったみたい。」

あたしは慌てて綺羅人に笑みを返した。

すると、綺羅人はなんとなく腑に落ちてない感じで

「ふーん。」と言い、手を繋いできた。

そして、「今日はデートだもん。」とにっこり笑った。

「うん、そうだね。」

あたしは綺羅人の優しい手の暖かさにすごく癒された気がした。

もう・・・いい。

あたしが元奥さんやその不倫相手だった男性に何か言える立場じゃないし、

例え、言ったとしても克彦さんが生き返る訳じゃない。

生き返ったとしても、あたしが克彦さんのところへ戻る事もないのだから。

もう、忘れよう・・・。

綺羅人と手を繋いで自然とそう思えた。

そうして、綺羅人と手を繋いだまま映画館の前に来た時、

「綺羅人さんっ！？」

と、言う声に綺羅人は足を止めた。

・・・？

あたしと綺羅人の目の前には２０代前半だと思われる女の子がいた。

「彩穂・・・。」

綺羅人の繋いでいる手がピクリと動いた。

「・・・。」

「・・・。」

綺羅人と“彩穂”と呼ばれた女の子は黙ったまま見つめ合い、

そして、綺羅人はあたしの手をぎゅっと握って

そのまま無言で再び映画館の中へと歩き始めた。

「待って、綺羅人さんっ！」

だけど、の女の子が綺羅人を呼び止めた。

綺羅人は振り向くこともしない。

「綺羅人？」
あたしの声にも反応しないでスタスタと歩いている。
こんな綺羅人は初めてだ。
普段、あたしの前では笑っているのに
今は眉間に皺を寄せている。
誰なんだろう？
「綺羅人さんっ！」
その女の子は綺羅人の腕を掴んだ。
綺羅人はようやく足を止め、振り向いた。
「どうして、勝手に婚約を解消したりしたの？」

・・・え？

婚約？

「・・・それは、君のお父さんに話しただろう？」

綺羅人は顔を顰め、いつもより少し低い声で言った。

「そんなんじゃ、納得できる訳ないじゃない！

携帯も解約しちゃってるし、お店だって勝手に辞めちゃうし、

マンションにもずっと帰ってきてないみたいだし・・・。

・・・もしかして、原因はこの人？」

女の子があたしに鋭い視線を向けた。

「・・・。」

綺羅人は否定も肯定もしなかった。

どういう事？

「綺羅人さんとは、いつからなんですか？」

「い、いつからって・・・」

「一年前のあの時は、まだ綺羅人さんと会ってなかったですよね？

・・・それなのに、どうして、あなたが・・・」

「彩穂っ！やめろよっ。」

女の子があたしに詰め寄ると綺羅人がそれを制した。

この子・・・あたしの事、知ってるの？

“一年前のあの時”って・・・？

「綺羅人・・・ちゃんと話したほうがいいんじゃない？」

綺羅人はまったくその気はなさそうだけど、

女の子の方はそうはいかなそうだ。

「でも・・・」

綺羅人はあたしを一人にしたくないのか

心配そうな顔をした。

「あたしなら大丈夫だから。」

「・・・。」

「ホントに大丈夫。だから・・・ね？

ちゃんと話し合って？」

そう言って、繋いだ手の力を緩めると

「うん・・・わかった。」

と、綺羅人も手の力を緩めた。

そして・・・あたしと綺羅人の手が離れた――――。

「・・・帰ったら、ちゃんと話すから。」

踵を返し、歩き始めると綺羅人の声が背中越しに聞こえた。

―13―

部屋に戻ったあたしはとりあえずソファーに座った。

綺羅人・・・もう戻ってこないかも・・・。

なんとなくそう思った。

例えば、飼っていた猫が実は自分の所に来る前、

他の家で飼われていて、偶然前の飼い主と再会し、

結局、元の飼い主の所に戻った。

・・・なんて話はよくある事。

まさか、あの女の子が綺羅人を飼っていたとは思えないけれど

婚約者だったみたいだし。

“婚約者”

その言葉に胸がチクリとした。

もう戻ってこないかも・・・

そう思うと、もっと胸がチクリとした。

確かに綺羅人は仔猫みたいに可愛いし、

最初は“飼っている”感じだった。

でも、ずっとあたしの支えになってくれていた。

最近は“飼っている”感覚はまるでなくて

あたしの方が綺羅人に守ってもらってる感じで

すごく安心してた・・・。

ずっとこんな生活が続けば・・・って思ってた。

だから綺羅人が“もう戻って来ないかも・・・”って思うと

涙が出てきた・・・。

―――髪の毛を優しく撫でられている感覚で目が覚めた。

いつの間にか眠ってしまったみたいだ。

「あ、起きちゃった。」

その声に薄っすら目を開けるとぼんやりと顔が見えた。

・・・綺羅人？

「ただいま。」

そう言われても、ずっと髪を撫でられているから
気持ちよくてまた目を閉じた。

「あれ？また寝た。」

綺羅人の声・・・

「しょうがないなぁー。」とクスクス笑っている。

そして、次にあたしが目を覚ますと目の前に
綺羅人の顔をあった。

「っ！？」

慌ててあたしが起きると「やっと起きた？」と

綺羅人が笑っていた。

「綺羅人・・・。」

戻って来てくれたんだ・・・。

「ただいま。」

「・・・おかえり。」

よかった・・・。

「わー、凌子さんっ。なんで泣くの？」
綺羅人がこの部屋に帰ってきてくれた事が嬉しくて
思わず泣き出したあたしを見て、綺羅人は慌てた。

「・・・だって、もう、戻って来ない気が、してたから・・・。」

「どうして？」

「・・・わかんない・・・。」

「俺の帰る所はここだけだよ。」
綺羅人はそう言うとにっこり笑った。

そして、あたしが泣き止むと「ちゃんと話してきたよ。」と言った。

「彼女・・・俺の婚約者だったんだ。
でも、３ヶ月前に俺の方から婚約破棄した。」

綺羅人は大きく息を吸い込んでから話し始めた。

「凌子さん、『ＩＬ　ＣＯＶＯ』っていうお店の内装とか
コーディネートしたの憶えてる？」

「それって・・・品川のイタリアレストランだっけ？」

「うん、そう。・・・彩穂はそこのオーナーのお嬢さんでね、
凌子さんとも一度顔を合わせてるんだけど・・・憶えてないよね
？」

「う、ん・・・。」

だから、あたしの事知ってたんだ・・・。

「で、実は俺、そこの総括シェフだったんだ。」

「えーっ！？」

う、うっそぉー？

「びっくりした？」

綺羅人はあたしの顔を見てクスッと笑った。

どうりで・・・料理上手いはずだわ・・・。

それに一緒に買い物に行った時もやけに食材を選ぶの上手かったし、
キッチンを片付けるが上手いのも、いつかのハンバーグが焦げるのが
わかったのも、そして素早く食器を並べたりしてたのも・・・
今になって全部納得がいった。

「イタリアで修行して、帰国してから別の店で働いてたんだけど
彩穂のお父さんに腕を買われて今度新しくオープンさせる
店を任せたいって言われたんだ。
条件はただ一つ、彩穂との結婚だった。
俺はその時、付き合ってる人も好きな人もいなかったし、
彩穂とも会ってみていい子だなって思った。
それに何より彩穂が俺の事を気に入ってくれたから
すぐに婚約ってことになったんだ。
早く自分の店が持ちたいって思ってたし。
・・・でも・・・ある時、出会っちゃったんだ。」

「・・・？誰に？」

「凌子さんに。」

「彩穂さんが？」

「うん・・・彩穂もだけど、俺も。」

「綺羅人も？・・・でも、あたしあの時はオーナーと彩穂さんしか会ってないと思う。そのお店のシェフとはお話してないし・・・」

「うん、確かに直接は会ってないよ。

でも、厨房から凌子さんの事見てた。」

「え・・・。」

「ちょうど一年前・・・で、その日からずっと凌子さんの事が
気になりはじめて、段々、彩穂との事も考えられなくなった。
・・・それで、耐え切れなくなって彩穂に婚約を解消したいって
言った。
他に好きな人ができたって言って、でも・・・あいつは
絶対に嫌だって言ったんだ・・・。
それでオーナーにも店を辞めたいって言ったら、
別に元々俺の腕が欲しかった訳じゃないからあっさりいいって言
われた。」

「それって・・・」

「要するに、彩穂の為に俺を引き抜いたって。
オーナー曰く、俺に任せる店は潰れても構わないって思ってたって。

だから、内装は全部彩穂の思い通りにやらせたし、
シェフも彩穂が別の店で働いていた俺を見かけて気に入ったからだって。
全部、娘の為・・・彩穂が結婚しても自分の手元に置いておきたくて
自分の思い通りになる男なら誰だってよかったんだ・・・。
それで・・・なんか、自信なくなって店も辞めて
オーナーに彩穂との婚約も解消するって言ってそれっきり・・・逃げた。」

綺羅人が初めの頃、あたしに料理を食べさせようとしなかったのも、
あたしが「おいしいよ。」って言ってもあまり嬉しそうじゃなかったのも
自信がなかったからなんだ・・・。

「それで3ヶ月前に自棄酒してる時、偶然凌子さんを見かけて
酔った勢いで一緒にタクシーに乗っちゃった。」

「じゃあ・・・あの時、綺羅人はもうあたしの事知ってて・・・」

「うん・・・ごめん。今まで黙ってて。」

「そっか・・・。」

克彦さんからの手紙が来た時、綺羅人が

“どんなに愛されてても自分がその人の事を愛する事が出来なきゃ、

お互い傷つけ合うだけだよ・・・。”と言ったことが

ようやくわかった。

―14―

『好きだよ・・・。俺と結婚してくれ。』

その台詞の後にキスをした・・・。

―――のは、映画のワンシーン。

あたしと綺羅人は昨日観そびれた映画を見に来ていた。

これ・・・ホントにＳＦ映画・・・？

スクリーンの中では主人公達が熱いキスを交わしている。

そして、すぐに場面が切り替わり、ラブシーンはそこで終わった。

ちなみにここはカップルシート。

綺羅人とあたしはずっと手を繋いだまま映画を観ている。

綺羅人の気持ちは昨夜、彩穂さんとの事を話してくれた後に聞いた。

“凌子さんが好きだ・・・ペットでもいいから、傍にいたい。”

そう言われて抱きしめられた。

あたしが「ペットじゃないよ。」と言うと、

「じゃあ、凌子さんにとって俺は何？」と、聞かれた。

“恋人未満・・・かな。”

そうとしか答えられなかった。

綺羅人の事は多分、好きなんだと思う。

昨日、彩穂さんが婚約者だったって聞いて胸が痛んだから。

もう彩穂さんのところから戻ってこないかもって思った時も
すごく悲しかったから。
だから、目が覚めて綺羅人の顔があった時はすごく嬉しかった。
あたしの中の綺羅人の存在はもう“ペット”なんかじゃない。
でも、それはただ克彦さんとの事もあったから
気持ちが不安定なだけなのかもしれない。

“ペット以上、恋人未満”

それが今のあたしにとっての綺羅人。

それから数日が経って、あたしは前みたいに笑えるようになった。
それは多分、綺羅人が“好きだよ”って言ってくれたから。

それがすごく嬉しかった・・・。

綺羅人は相変わらず駅まで迎えに来てくれている。

朝食も夕食もずっと作ってくれている。

あたしが「ホントにもう大丈夫だよ？」と言っても

「俺がやりたいからやってるの。」と笑うだけだった。

ずっとこんな日が続くと思っていた。

ずっとこんな日が続いて欲しいと願っていた。

・・・でも――――。

「・・・ねぇ、凌子さん。」

夜、いつものように二人でベッドに入って寝ていると
綺羅人が思い切ったように口を開いた。

「うん？」

「俺、もう一度イタリアに行こうと思ってるんだ。」

・・・え？

「もう一度、ちゃんとイタリアで料理の勉強して、
ちゃんと自分に自信が持てるようになったら帰ってくる。
・・・それでね・・・俺、またここに帰ってきてもいい？」
綺羅人はそう言うとあたしの顔をじっと見つめた。

綺羅人がイタリアへ行く・・・。

あたしはその事がショックだった。

「・・・また、ここに戻って来たい・・・ダメ？」

「ダメじゃないよ・・・・。」

でも・・・

心の中では「行かないでっ！」って、叫んでる。

「ダメじゃないけど・・・・」

ダメじゃないけれど・・・・

今度こそ本当に綺羅人が戻ってこない気がした。

あたし・・・綺羅人の事が好きだ・・・。

克彦さんの事があったからとか、そんなの関係ない。

今、やっとわかった―――。

「・・・いつ、帰ってくるの・・・？」

「わかんない・・・。２年後になるか、３年後になるか・・・

もしかしたら、もっと・・・」

「それじゃ、忘れちゃうよっ？」

そんなに長く離れていたらきっと、綺羅人はあたしの事なんか忘れて

ここへはもう戻ってこない。

「忘れないよ、俺は絶対、凌子さんの事忘れない。」

「そんなの、わかんないじゃん・・・。」

「絶対忘れない。」

「じゃあ、あたしが忘れちゃったら・・・どうするの・・・？」

忘れられる訳はない。

それでも・・・
綺羅人に何か言って欲しかった。

「・・・なら・・・、忘れられなくする。」
綺羅人はそう言うとあたしの上に覆いかぶさってきた――――。

――――翌朝。

目が覚めると綺羅人の姿はもうなかった。
早朝に部屋を出て行ったみたいだ。
綺羅人の荷物もなくなっている。

唯一つ、ソファーのガラステーブルの上に
手紙と鍵が置いてあった。

でも、あたしの部屋の鍵じゃない。

ーーーーーーーーーー

俺のマンションの鍵、持ってて。

行ってきます。

綺羅人

ーーーーーーーーーー

綺羅人・・・帰るところあったんじゃない・・・。

なんとなく最初からそんな気はしていた。

でも、それを口にしてしまえば綺羅人が

ここから出て行ってしまう気がして言えなかった。

―Ｅｐｉｌｏｇｕｅ―

―――三年後。

綺羅人がこの部屋を出て行ってからもうすぐ四年目になる。

その間、電話もメールもまったくない。

手紙も・・・・

何もない・・・・。

やっぱり、綺羅人はあたしの事なんて忘れてしまったんだろう。

最初はきっと忙しいんだろうと思っていた。

だから、あたしからも連絡はしないでおこうと思った。

でも、ある時気がついた。

そういえば、あたし・・・何も教えてもらっていない。

綺羅人の携帯番号もメールアドレスも・・・

綺羅人が置いていった鍵だって、どこのマンションだか知らない。

いっそ捨ててしまおうかとも思った。

でも、捨ててしまうと綺羅人との唯一の繋がりが

切れてしまう気がして捨てられずにいた。

あたしは３１歳になった。

とうとう三十路を越えてしまった。

・・・と、いう事は綺羅人はあの頃のあたしと同じ２８歳か。

そしてこの間、同僚の奥田くんが結婚した。

後輩の女の子も次々に結婚して“寿退社”して行く。

変わらないのはあたしだけだな・・・。

あ、でも一つだけ変わった事があった。

それは、克彦さんの最後の手紙を処分した事。

克彦さんの三回忌の日に燃やした。

それで気持ちの整理だけは、やっとついた。

それ以外は何も変わらない。

灯りが点いていない部屋に帰るのも一人分の食事を作るのにも慣れた。

というより、綺羅人が来る前の生活に戻っただけ。

そして、今日もまたいつものように仕事を終えて部屋に戻り、

玄関のドアを開けるとリビングに灯りが点いていた。

あれ？

あたし、また点けっ放しで行っちゃった？

そう思っているとリビングのドアからひょっこり顔が出てきた。

「・・・あっ。」

あたしは一瞬誰だかわからなかった。

「おかえり、凌子さん。」

でも、そう言ってにっこり笑った顔はあの頃と変わらない。

「綺羅人・・・っ！」

「ただい・・・わーっ！なんでいきなり泣いてんのっ！？」

綺羅人はそう言うと慌ててあたしに駆け寄った。

自分でも気がつかないうちに涙が出てきていた。

「だって・・・もう、帰ってこないのかと思ってた。」

「ごめん・・・ずっと連絡しなくて。」

「ばかぁ・・・。」

「ごめん。」

「・・・。」

「・・・ごめん。」

「おかえり・・・綺羅人。」

「ただいま。」

そう言って柔らかい笑みを浮かべた綺羅人の首には・・・

あの“首輪”があった――――。

―Epilogue―（後書き）

お陰様で完結致しました。
応援ありがとうございました。m（　）m

続編　ーペット以上、恋人以上・1ー

綺羅人がこの部屋に帰ってきた夜―――。

久しぶりに一緒に夕食を食べた後、

「凌子さん、見て見て♪」

綺羅人はあたしの目の前に金と銀のメダルを並べた。

「銀賞が去年獲ったヤツで、金賞が今年獲ったヤツなんだ。」

それは綺羅人がイタリアの国際料理コンクールで獲った

金賞と銀賞の証のメダルだった。

「・・・すごい・・・おめでとうっ！」

あたしは思わず綺羅人に抱きついた。

「このコンクールで金賞獲ったら帰ろうって決めてて、
去年に賭けてたんだけど銀賞だったから、
今年もう一回挑戦してみたんだ。
そしたら金賞獲っちゃった♪」

「銀賞でも十分すごいのにーっ！」

「ホントは早く凌子さんの所に帰りたかったんだけど
でも、凌子さんの事待たせてるって思ったら、
やっぱり一番輝いてるメダルをお土産にしたかったから。」
綺羅人はそう言うと金と銀のメダルを持ってあたしに
にこっっと笑いかけた。
その笑顔はものすごくキラキラしていて・・・

“もう一度、ちゃんとイタリアで料理の勉強して、
ちゃんと自分に自信が持てるようになったら帰ってくる。”

あたしは3年前、綺羅人がここを出て行く時に言った言葉を思い出していた。

「すごい、すごい、すごーいっ！
すごいよ、綺羅人っ。」

綺羅人は約束通り、ここにちゃんと帰って来てくれた。

「でも、凌子さんが待っててくれて、よかった・・・。
この部屋に帰って来る時、凌子さんがもう引っ越してて
別の人の部屋になってたらどうしようとか、
誰かと同棲してたりしたらどうしようとか・・・

ちょっと不安だったんだ。」

「それなら連絡の一つでもくれればよかったのにー。」

「ごめん・・・だって、なんか凌子さんの声とか
聞いちゃうと、つい甘えちゃって弱音とか吐きそうだったから。」

「弱音くらい全然吐いたっていいのに。」

「ダメ、それじゃあ俺全然頑張ってない事になるじゃん。」
綺羅人はそう言って笑ったけれど・・・、きっと
この二つのメダルを獲るのにものすごく頑張ったんだろうな。
去年銀賞でそれで悔しくて、今年もう一度挑戦して・・・

多分、あたしが想像している以上に
ずっとずっと一人で頑張って・・・。

――――それから日が経つにつれ、
綺羅人は徐々に外に出掛ける事が多くなり、
帰りも遅くなり始めた。

綺羅人が金賞と銀賞を獲った国際コンクールは
料理人の世界ではとても有名な大きなコンクールで
いろんなグルメ番組や雑誌などから取材のオファーが殺到した。

今も仕事から帰ってテレビをつけてみると、
ちょうど綺羅人が出ている番組だった。

私はテレビ画面に映る“料理人”の綺羅人の姿に
ドキリとした。

初めて見る“料理人”としての綺羅人。

コックコートを着て料理している姿。

真剣な顔。

テレビの中の綺羅人はあたしが知っている綺羅人とは
まるで別人だった。

なんだか急に綺羅人が遠くへ行った気がした・・・。

それに加えて、綺羅人は自分で新しくお店を始めるらしく、

その物件やスタッフなんかも探している。
今夜もとりあえずご飯は作ったものの、
綺羅人はまだ帰ってきていない。
一緒に食事がしたくて、話がしたくて
ずっと待っているけれど
結局、あたし一人で先に食べている・・・
そんなのがもう二週間も続いていた。

「ハァ・・・。」
溜め息をついて、ダイニングテーブルに顔を伏せた。
綺羅人、遅いなぁー。
顔をあげて部屋の時計を見ると、もう9時を回っていた。

先に食べちゃおうかなぁー・・・・。

「もぉ・・・、ばか・・・・。」

テレビの中の綺羅人にポツリと言ってはみたけれど・・・、

本人が目の前にいないから、寂しい気持ちはちっとも晴れなかった

――――。

続編　ーペット以上、恋人以上・2ー

「ねぇ、凌子さん、明日一緒に行って欲しいところがあるんだけど。」

綺羅人が戻って来て一ヶ月が経ったある日、
不意に綺羅人から言われた。

明日は土曜日。
仕事はお休みだし、特に予定もない。

「うん。」

あたしが小さく首を縦に振りながら返事をすると
綺羅人はにんまり笑った。
相変わらず可愛い笑顔だ。

「どこ行くの？」

「行ってからのお楽しみ♪」
綺羅人は笑顔のまま答えた。

「うん、わかった。」

どこかな、どこかな？

デートならデートって言うはずだし、
綺羅人の事だからまた何かあたしをびっくりさせようとして
企んでるのかもしれない。
結構サプライズ好きみたいだしね。

———翌朝。

「凌子さん、おはよ♪」

綺羅人の声で起こされるのももう慣れてきた。

「・・・ん、・・・おはよー。」

まだ少し眠い目を擦りながら目を開けると

綺羅人の顔がすぐそこまで近づいてきていて

軽くキスをされた。

こんな風に“おはようのキス”をされるのも、

もう、いつもの朝の習慣になっている。

少し早めの昼食を食べた後、綺羅人に連れて行かれた場所は

7つ先の駅の赤坂だった。

そして、駅前で一人の男性と合流した。

この人・・・誰・・・？

「F不動産の相川と申します。」

どうやら不動産会社の人らしい。

綺羅人の知り合いかな？

「一ノ瀬です。」

不思議に思いながらもあたしはとりあえず愛想笑いで

その男性に挨拶をした。

――――カチャン・・・・、

「どうぞ。」

相川さんは駅から程近いマンションにあたしと綺羅人を

案内してくれた。

５階の角にある部屋の鍵を開け、大きくドアを開けると

あたし達を先に中に入れてくれた。

綺麗な部屋・・・

そのマンションはどうやら出来たばかりらしく、

今あたしと綺羅人が住んでいる部屋よりも

綺麗で広かった。

間取りもあたしの部屋は１ＬＤＫだけどここは３ＬＤＫで二部屋も

多いし、
そしてなによりキッチンが広い。
ガス口も今の部屋は2口しかないけれど、ここは3口ある。
大き目の冷蔵庫とオーブンも置けそうだし、シンクも大きい。
これなら料理人の綺羅人が使うにしても十分だろう。
今の部屋のキッチンじゃ、綺羅人にとって物足りないのかもしれない。

「凌子さん、どう？この部屋。」
一通り部屋を見た後、バルコニーから外を眺めていると
後ろから綺羅人の声が聞こえた。
「ここなら、凌子さんの会社にも少しだけ近くなるし、
2人で住むにはちょうどいいと思うんだけど・・・どうかな？」

「でも・・・綺羅人、こっちの部屋はどうするの？」
あたしは綺羅人がイタリアに行く前に預けてくれた
綺羅人の部屋の鍵を見せた。

「それなら心配いらないよ。そこは処分するから。」

「処分て？」

「あっちのマンション売って、そのお金で別のマンション買うの。
だから、凌子さんが気に入ってくれたらここに決めちゃおっかなーって。」

「な、なんで？」

「あっちのマンションは彩穂との新居にって彩穂のお父さんが
買ってくれた部屋なんだ。
彩穂と別れた時に手切れ金だとかなんとかで結局、
そのまま貰うことになったんだけど・・・、
でも、俺はそんな部屋に凌子さんと一緒に住みたくはなかったし、
かといって、今の部屋だと本格的に俺の荷物を移すと
狭くなっちゃうからね。
だったら、思い切ってあっちの部屋を処分して
ついでにどうせなら、キッチンも広いトコにしようと思って。
それに、ここなら今度俺が出す店にも近いから、
少しは凌子さんと一緒の時間が作れるかなー？って。」

「・・・っ。」

あたしは綺羅人の言葉に驚いた。

綺羅人、あたしの事ちゃんと考えててくれたんだ・・・。

続編　ーペット以上、恋人以上・３ー

あたしと綺羅人は結局、あの赤坂のマンションに移る事になった。

そして今日はそのマンションに入居する日だ。

綺羅人は自分の部屋の家具は買い揃える前に

彩穂さんと別れたからほとんど無いんだと言っていた。

だから綺羅人の部屋からはあまり荷物がないと

思っていたんだけど・・・

「なんか・・・すごい荷物だね・・・。」

目の前にドーンと積み上げられたダンボール。

あたしはそのダンボールの山を見上げた。

「凌子さん、口開いてるよ?」

綺羅人はクスクスと笑いながら更にダンボールを
あたしの目の前に積み上げた。

そのダンボールの中身は綺羅人が料理人なんだと言う事を
改めて感じさせる物ばかりだった。
たくさんの調理器具やレシピ本、料理関係の本や
綺羅人が修行時代に自分で纏めて書いていたノート、
後は今までに受賞したコンクールの盾やメダル、
トロフィーなんかもあった。

――――夜になり、一通り荷物も運び終えて、
とりあえず身の回りの事には困らない程度には片付いた。

「はい。」

そして、ソファーに座ってボーッとしていると
綺羅人がコーヒーを淹れて持って来てくれた。

「ありがとー♪」
あたしがマグカップを両手受け取ると
綺羅人は自分のマグカップをガラステーブルの上に置いて
ゴロンと寝転がってあたしの膝を枕にした。

「凌子さんの膝枕気持ちいい♪」

なんか・・・猫が膝の上でゴロゴロしてるみたい。

最近は綺羅人がすごく忙しかったから
こんな風に膝枕をしながら頭を撫でたりする事も
無くなっていた。

「“ペット”復活？」

だけど、あたしがクスッと笑いながら言うと

「うん・・・、でももうペットは終わり。」

と、綺羅人が言った。

・・・？

“ペットは終わり”？

あたしはその言葉にものすごく不安を覚えた。

すると、綺羅人はにこっと笑って起き上がり、

「今日からは凌子さんが俺のペット。

だから首輪の代わりにこれつけといてね。」

と、あたしの手を取って何かをはめた。

「・・・っ！？」

あたしは言葉を失った。

これって・・・

綺羅人があたしの薬指にはめてくれたものは

ダイヤの指輪だった。

「綺羅人・・・」

そして、綺羅人の顔を見上げると

そっと抱きしめられた。

「・・・凌子さん、俺、これからも凌子さんの事、

いっぱい不安にさせたり、寂しい思いをさせたり
すると思う・・・。
でも、そうさせないように頑張るから、
大事にするから・・・だから・・・
ずっと俺の傍にいてください。」

綺羅人はあたしが不安に感じてた事も寂しいって思ってた事も
わかっててくれたんだ・・・。

「は、い・・・。」
あたしは嬉しくて嬉しくて・・・、気がついたら泣いていた。

綺羅人は泣きながら返事をしたあたしに
「凌子さん、また泣いてる。」
と、優しく笑いながら言った。

もぅー、誰が泣かせてると思ってるのよー？

嬉しくて涙が溢れて止まらない。

綺羅人は片手でティッシュを数枚取ると

あたしの涙を拭いてくれた。

あたしは多分、綺羅人が言った通りこれから先、

不安になったり、寂しいって思う事があるんだと思う。

それでも時々、綺羅人がこうしてあたしの涙を拭いてくれるなら、

きっと幸せでいられる――――。

そんな気がした・・・。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2292f/

ペット以上、恋人未満

2010年10月10日11時06分発行